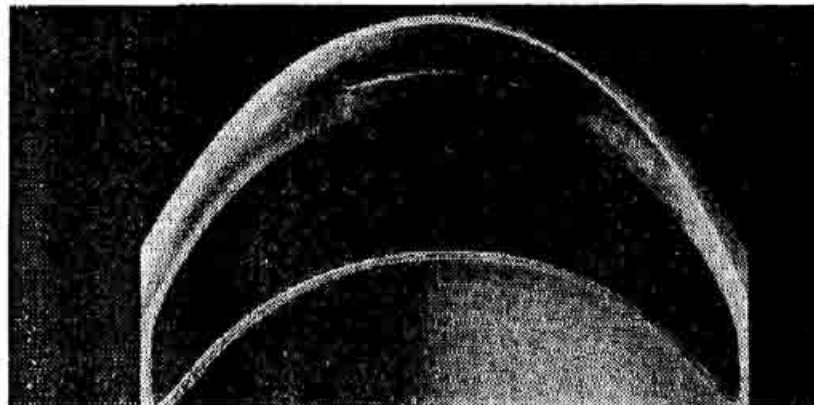


ARAI NEWS



世界GPも、テレビやビデオで気軽に見られるようになり、バイク乗りにとってロードレースもますます身近に感じられるようになってきました。しかし、こういったテレビやビデオを見るにつけ心配になることがあります。それは転倒の仕方です。以前は、タイヤが滑ると、そのままバイクが先に滑って行って、ライダーもバイクの後ろを追うようにお尻から落ちて滑っていくという転倒例が多くありました。しかし最近の転倒例を見ると、マシンやタイヤの進歩によるものなのでしょうが、転倒しそうになったときに、突然タイヤのグリップが回復して、マシンの反対側にライダーが激しく叩き付けられてしまうハイサイドと呼ばれる転倒例が以前とは比較にならぬほど多くなってきたようです。このハイサイドによる衝撃は、非常に大きなもので、中速コーナーや高速コーナーで飛ばされた時に、ヘルメットに加わる衝撃などハンパなものではありません。ヘルメットの安全性は目には見えぬものだけに、つくづく安全なものを使ってもらいたいものだと思わずにはいられません。



ヘルメットの安全性における一番大きな要素

は、やはり帽体です。ハイサイドのように衝撃が大きくなればなるほど帽体は頑丈でなければなりません。しかしどこを打つか予測できないだけに均一な厚みが必要なのです。いくら頑丈でも厚みにバラツキがあれば、薄い部分に衝撃が集中してしまうからです。ところでアライなど国内主要メーカーのほとんどは、バック法と呼ばれる熱加圧方式による成型方法で帽体が作られています。このバック法では、外国製品の多くに見られるハンドメイド法よりも、スーパーファイバーなどの繊維の含有率が高くなるため、同じ厚みでも強度を高く保つことができますが、製法上の欠点として均一な厚みを保持するのが難しいという点があります。

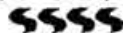


アライでは、この均一な厚みを保持するために、様々な手段を講じていますが、10数年前から変わらず続けている確かな方法があります。それは人間の手によって確認することです。成型部門で製造された帽体は、成型部門内で一隅残らず全ての厚みがチェックされます。そして成型部門でチェックされた帽体は、そのまま検査部門に送られ、再び全数の厚みがチェックされます。一つの帽体を2度までも

しかも全数にわたりチェックする。時間と手間のかかる原始的な方法ですが、世界中どここのメーカーもやっていない一番確かな方法で均一な厚みを保っているのです。



アライでは、この全数2度検査により、どんな一流選手が使用するヘルメットでも、一般に市販させていたかものと区別することなく、生産ラインからそのまま帽体を抜き取り、自備をもって使用していただいています。ヘルメットは、目に見えぬ箇所こそ価値があるものです。帽体の頑丈さ、柔らかな親膚性、確かなアゴヒモなど、アライは、たゆまなく安全性を追求していきます。



ところで、レーサーだけでなく、市販車の高性能化に伴い、峠を走るライダーの中でもハイサイドによる転倒は増えているようです。グリーンもなく、ガードレールのある一般道はサーキットよりはるかに危険です。いくら頑丈で作ってあるといっても、ヘルメットは、安全の一要素に過ぎないのですからくれぐれも安全運転を心掛けてください。もしコーナーを攻めたいのなら、サーキットならばいくらでもできます。一時期のパニック状態は解消されて、サーキットで走れる時間も増えて来たようです。ぜひサーキットライセンスを取得して見てはいかがでしょうか。



マシン進化でリスクも増える

レースで安心できるヘルメットとは。

(株)アライヘルメット
〒330 埼玉県大宮市東町2-12
TEL (048) 641-3825~7



●アフターサービスの窓口は品質管理課です。
製品の事なら、お気軽にご相談ください。
直通 TEL (048) 645-3561